

Ⅱ 自殺・ノイローゼ・人間不信・競争

——なにがどう進んできたか

1 機械を奪われてついでに差別——近松の場合

天皇と三菱の悪口は許さん

近松さんは、三菱の自分にたいする差別の実状を訴える手記の初めを、こんな言葉で書きだしている。

「私は、机の上に父の位牌を置き、お茶をなみなみとつぎながら『お父っあん、二人でお茶を飲もう、話しましょう。お父っあんの思うごと、えらい軍人にはなれんやっただけど、今は軍人よりも強い男になったばい。今からもっともつと苦しみと辛さがくるばってん、俺には過ぎたかあさんと、可愛い息子や娘もいる』そして、お父っあんが『俺も戦争を生き抜いてきたとぞ、それくらいのこと、閉口たれるな』と、あの小さな眼で、口をへの字に曲げていって顔の思い浮かべながら、この手記を書いておられます」

近松さんは、大正十年生まれ。小学校三年生の時、交通事故で亡くなったお父さんの思い出が、今も、心に深く生きつづけ、悲しいにつけ、嬉しいにつけ、お父っあんよと呼びかけるのが

習慣になつてしまった。

「昔、私の前で、天皇と三菱の悪口をいうと叱られるといつて、みんなから恐れられたものでした。幼い頃、父の膝でできた、日露戦争の手柄話や私を軍人にするため幼年学校、士官学校に入れるのを楽しみにしていたことなどが、私の人間をつくつていたと思います」

近松さんは、結局、お父さんの死で、十三人兄弟の一人として、とても、幼年学校へ行くどころでなく、高等小学校を卒業するとともに、鉄工場で、旋盤工として働いた。その頃、軍人にならないなら、せめて長崎の誇りである三菱の職工さんになりたいと思つて、三菱兵器製作所を志願したのに、合格しなかつたことが、悲しく辛い思い出として残っている。

二十歳で、徴兵で兵隊となり、日本各地の高射砲隊などを転々とし、二十一年に、原爆でみるかげもなくなった長崎に帰つてきた。荒廃した故郷には働く仕事もなく、闇商品の行商人となり、五島で魚を仕入れて、大阪で売りさばき、その金で化粧品を仕入れて、長崎で売るといふ生活がつづいた。その頃、せっかく、苦勞して品物を売つてつづいた金を、アメリカ兵にとられて、途方に暮れたこともあった。やつとの思いで、長崎に帰り、製材所で働くようになったある日、思いがけない募集広告を見た。三菱製機（旧兵器）が機械経験工を募集するというのだ。近松さんは、少年の頃、果たせなかつた夢を実現しようとして、願書を書き、一生懸命、試験場にむかひつた。思いがけないことに、旋盤の技術試験を受ける現場に、近松さんが技術を教えられた先輩がいた。なにくれとめんどうをみて、口添えをしてくれたお蔭で、とうとう、その日の中に、入社が決まつた。

「あげん嬉しかことはなかったです。今から、三菱の社員になった、そげん思っただけで胸が一杯になりました。私は、誓いました。軍隊で死にそこなった生命をかけて、三菱のために働こうと」

近松さんが三菱社員になれた歓びと、立派な旋盤工になろうと心に決めた決意が、それから近松さんの人生の背骨となった。だから、若者たちが三菱と皇族の悪口をいうのががまんできず、撲ったことも事実なのだ。

「私は、こうして生きて働くことができるのも、三菱あったればこそと思い、恩義を忘れた若者の横着さが、泣くほど、口惜しかったとです。それが二十年前の私でした」

旋盤にかけた男から奪われた機械

「小型四尺旋盤、六尺ターレット万能旋盤、八尺ターレット、立型ターニング旋盤」

これは近松さんが、入社後、三十六年頃までの間に使った旋盤の種類である。そして、労働組合の分裂が起こる昭和四十年頃には、ネックマシン（自動）であるプラノミラ削専用MP10機という機械が、近松さん愛用の機械であった。

その頃の近松さんは、四十四、五歳で、家庭的にも献身的な奥さんと二男一女の子どもに恵まれ、仕事にすべてを集中することのできる熟練労働者の境地に到達していた。だから、なんの迷いもなく、残業で疲れて帰っても、必ず、布団に入って眠る前の一刻を明日の作業の段取を考えるのが日課になっていた。同じ作業の繰り返しでも、どうすれば常に、新たな気持で、仕事にと

りくめるか、箱や棚に入っている工具類は暗闇でも、何時でも、とりだせるように整理整頓しておくようにしようなどと、每晚考え、その通りに実行していたのだ。

近松さんの仕事の立派さと、仕事場の整理整頓の見事さは、周囲も上司もみんなが認めていた。ある時は、部長巡視で、整理整頓が眼にとまり、その後、よその作業長たちが集団で見学にきたことがあった。また、近松さんの作った部品を使う、組立の人がきて、「加工面の仕上りが良いから、合せ面の手入れが短時間ですみます。ほんとに近松さんの仕事は立派です」

とわざわざいってくれた人もいたし、また、依頼先の係長に、近松の加工品のことで、係技師がほめられて帰ってきて、気嫌よく報告されたこともあった。

こうして、仕事一筋に生きてきた近松さんにとって、分裂の中で、ばたばた同僚たちがバスに乗り遅れるように、新労に移っていくのが、どうも納得がいかなかった。

「近松さん、あんたも、もうそろそろ、新しい組合に移らんね」

近松さんにも、三度誘いがあった。

だが、近松さんは、さっさと、分会を見捨てて、汐のひくように行ってしまう行動について行く気持になれなかった。お互い働く人間なのだから、一つにまとまってやっていくことが一番大切だとも考えた。真面目な分会の活動家たちの正しい生き方に共鳴することもあった。仕事を大事にすることと、労働者の権利を守ることが一つにならなければならないとも思うようになった。

だから、近松さんは分会に踏みとどまってさまざま差別を受けるようになって、初めのう

ちは、黙って頑張った。大きな変化は、他所に、加勢仕事に行かされた時から始まった。理由は、近松さんのMP機械の仕事が減っているから、しばらく行ってほしいということだった。近松さんは不安だったので、

「加勢期間が終わって帰ってきたら、自分の機械に戻して欲しい」

という条件を、当時の組長工長に約束してもらって、加勢にいった。

一年たって、昭和四十三年に、加勢が終わり元の職場に戻った時、MP機械は使わせず「しばらく、他の機械の操作技術をおぼえてきてほしい。MP機と両方を使ってもらうから」といわれ、別のカッソー・ボーリング機の見習いをさせられた。

「約束が違うでなかですか」

近松さんは懸命に抗議したが、無視された。そして、ボーリング機の仕事も、つきっきりでなければならぬ状態で、MP機にいつ戻れるか、わからない不安な状態だった。

しかも、残業をさせてくれないので、十五、六万あった収入が一举に十二万に減ってしまい、五人家族が暮すのは大変で、育ち盛りの子どもに栄養のあるものを食べさせ、親は、粗末なものですませる毎日がつづいた。

がまんできずに、高瀬工長に理由をきくと、急に態度を変えて、いった。

「あんたは、今まで、加勢先で、徹夜作業などをして、大分もうかったようだから、其の分だけ、定時間で帰ってもらうことにしている」

あまりにひどい変りようと仕うちに、その場で抗議する気力もなく、ただ、これからの生活を

どうしていったらいいかに思い悩む毎日だった。

喫煙・便所・立話——すべてを監視

激しい差別の毎日が始まった。

職場で、近松さんのすることが、一つ一つ監視の対象になった。煙草を吸いに行くとき、副作業長から三十分も遊んでいたといわれたし、届出て、十五分間、便所で用を足していた時も、長過ぎると注意された。ロッカーに用事があった、とりにいくとき、必ず副作業長がついてくるし、工場内の通路で、ほんの一〇二分、同僚と立話すると、すぐ、作業長に呼び出されていわれた。

「今、君が立話をしていると電話があった」

近松さんは、その時を思い出し、悲しい表情でつぶやいた。

「作業長も憎かったが、すぐ、通報する人間のことを考えると、なんともいえない気持ちでした。ほんとうに、つらい毎日でした」

とうとう、仕事上、刃物の研磨が必要になって機械を離れても、上司が、近松さんの顔を見ながら、大げさな身振りで腕を伸ばして、腕時計で時間をみる恰好までするようになった。毎日毎日、監視の眼が光り、自分の慣れた機械には帰してもらえず、残業もさせてもらえない。定時で家に帰れば、苦しい暮しをじっとたえている奥さんに申しわけない。仕方なく、時間をつぶして九時頃、家に帰ると、奥さんがいたわるようにいった。

「久し振りの残業で、きつかったでしょう」

奥さんが、無理をして買っておいしてくれた鯨の刺身がまばゆく、食わずに待っていてくれた奥さんのいじらしさが身にしみた。

自分の機械をとりあげられ、機械工としての誇りも自信も傷つけられ、冷たい監視の眼にさらされる日々——近松さんは、しだいに、自分の精神がしぼんでいき、昔のように機械と仕事ることが頭に一杯つまって、充実した気持で家を出た朝があったことが、ウソのように思えた。会社に行くのも気が重く、ちょっとした風邪で、会社を休むようになった。

この悩みを誰かに語りたくても、その頃、分会員はみんな、それぞれの職場で激しくなった差別とたたかうのがせい一杯で、仲間同話しあうことも少なかった。奥さんにも真実を話す勇気がなかった。自分一人でたえるしかなかった。

こうした毎日がつづくうちに、近松さんは、耳鳴り、目まい、下痢がつづき、道で倒れて人に助けられたりして、三菱病院を初め、四つの病院にかかり、ノイローゼと診断された。肺気拡張症や臍丸のはれなど、さまざまな病気を併発して、一年近く入院、通院をくり返した。

その間に、経済的にはますます苦しくなり、奥さんの父親が癌で入院したために費用がいることも重なって、借金も増えた。

それでも近松さんは、なんとか身体も回復して、会社に復帰しようと努力した。三日たったら出勤するという夜、近松さんは、いろいろ考えているうちに、急に死を考えた。信用組合の借金は重なるばかり、会社に出勤しても、また、残業もできないし、病気で休んだ後だから、もう仕事もないかもしれない。このうえ、差別されながら、冷たい眼でみられながら、妻たちにつらい思

いを見せて、これから、一体どんな希望があるのだろうか……思い悩んだ末に、近松さんは、いつの間にか、お父さんの墓の前に坐っていた。

入水自殺をこえた日に

その時のことを、近松さんはつぎのように書いています。

「どのようにしたら死ぬるか、一思いに死ぬる事を考えて、いつも、私にだけ聞える、父の声もなく、子どもの頃、よく茂木の海岸で父とウニを取りにいった事を思い出し、深みにはまって溺れるのを助けてもらった場所を思い出し、其所で死のうと決心したのです。約一時間うつろに歩いただけで、今までの苦しみや辛さも忘れ、岩場にたたずみ、じっと空を眺めていました。星がきらめき、その美しさを思い浮べます。臉を閉じ、一思いに一歩足が出た時、突嗟に、母の顔が浮かび、子どもの顔、家内が子どもと一緒に食事を取っている姿、最後に、父の顔が鬼のように映り、『このばかたれ！ そがんことで閉口たれて、どがんとすつとか！』の音が聞え、同時に、波のしぶきが顔に叩きつけられ、その場で、大きな声を出して泣き、泣きながら『ようし、泣くだけ泣け。死んだら笑われるだけやっか。家内や子供から一生うらまれる。死んでたまるか』と思ひ直し、波の岩場に打ちつける音も激しく、その音は私を勇気づけるようでした」

近松さんは、その夜、遅く、わが家にたどりついた。奥さんは、突然、なにもいわずにいなくなったことを必配して、近松さんの帰りを、じりじりしながら待っていた。いつも、じっとおさえている奥さんが、こらえ切れないように、近松さんに文句をいった。

「ごげん遅くまでなんばしとったとね。あさってから出勤というのに、しっかりせんばいかんやかね」

奥さんはふだん溜めている不満をぶつつけるように、夫を叱咤するように、気持をぶつつけた。

「仕事に行くこととなつたらんじゃなかとね？　うちにほんとのこというてください。あんたがそげんことで、家の中がどがんなると思うとですか？　男じゃけん、しっかりせんば！」

近松さんは、妻の激しい言葉に逆上し、

「やかましい！　うぬが、なんば、偉そうに、いいよつとか！」

と、手もつけずに待っていた夕食の膳をひっくり返した。奥さんは、もうなにもいわず、だまって、壊れた茶碗を拾った。

近松さんの胸に、熱い激情がこみあげて、奥さんにすべてをぶちまけないではいられなくなつた。

「今まで、だまっとったとやが、おいが分会員で頑張つとることで、会社で、いろいろ嫌がらせ、されてきた……」

近松さんは、今まで、胸の中に収めていた、分裂攻撃開始以来の三菱のやり方を語り、毎日、作業長たちからやられる差別の実状をなにかも打ち明けた。三年の間、心を痛め、身体を痛め、死のうと思いつめるまで、自分一人の胸の中に押しこめてきた差別の真相を、全部、妻に話した。奥さんは、聞き終わると、いった。

「うすうす、感じてはおったのですが、そげん、ひどい仕打ちをされとるとは、思わんやった……きつかったね……」

妻が、きつかったねといってくれた、いたわりの気持が、近松さんの胸にずんと響いた。妻と一緒に悲しんでくれる、怒ってくれる、自分の味方になってくれる、身内に、今まで味わったことのない、力強い勇気のようなものがこみあげてきた。

「給料が少なくても、どうあんね。子どもたちにしっかり食べさせて、うちたちが、塩でも味噌でも、おかずにして喰べていけばよかでしょ。あんた一人で苦しんで、これからは、心配せんで、頑張らんね。うちも、編物もして頑張るけんね。苦しか時はみんな同じでしょ」

近松さんは、奥さんの手をとった。二人でしっかり、助け合って、暮しをなんとかしようと、その夜を語り明かした。

2 三菱の力で罪人にされ——犬塚の場合

おしつけられた無実の責任

犬塚さんは、今年二月ころ、定年を数ヶ年後にひかえて、自宅で療養中だった。諫早から、海岸に近い平坦な農村部に、犬塚さんの家があった。分会執行部の佐藤さんの車に乗せてもらって、長崎から二時間近くかかって、たどりついた。

犬塚さんは三年間の裁判闘争中で、五十余年の人生で初めてのさまざまな苦難を体験し、その精神的肉体的傷手のために、現在もなお、療養中の状態なのだ。

太い眉、短く刈った頭、がっしり大きい肩と背丈——写真の印象と、療養中ということで想像していた犬塚さんより、ずっとたくましく特徴のある長崎弁で、卒直に、話をしてもらえた。東京の人間に、長崎の真実を語ろうとされた気迫が、病気をこえた精神的強さを感じさせたのだから。奥さんが近所の海岸で採ってこられた、かきの塩ゆでを酢醬油でご馳走になりながら。

犬塚さんは、昭和四十六年の夏、艀装船の中で起こった、積荷落下による人身事故にたいする無実の責任をおしつけられた。事故が起ったのは七月九日。四月近くたって、十一月六日に、略式命令で、業務上過失罪で有罪。罰金五万円か、百日の実刑」という決定を伝えられた時、犬塚さんは気が動転して、なにをどうしたらいいか、わからなかった。末松係長と呼ばれて、

「裁判所が決めたことやから、黙認してくれんね」という言葉を耳にした時、思わず、

「なんて！」

と叫んで、理由をきき返していた。

「なんで、おいの責任になっとか？ 安全担当者も旗ぶりもおっとぞ！ おいが一人でやっとったっていうとか！」

係長は、会社も裁判所の考えと同じだとくり返していた。

この日になるまで、犬塚さんは、まさか自分が有罪にされるなど、夢にも、考えていなかった。

た。

それは、事故直後の警察調べや新聞発表がつぎのようにいつていたことに理由があった。

『作業中の二人けが

三菱造船 合図誤り網戸落ちる

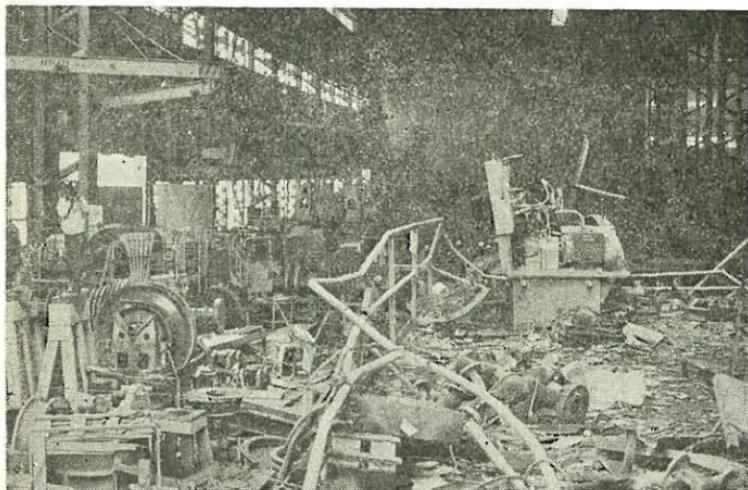
九日午後二時半ごろ、長崎市飽の浦町の三菱重工長崎造船所立神岸壁に係留中の二十万トンタンカーで、鉄製網戸の取り付け作業をしていた工員二人に落ちてきた網戸が当たり、大けがをした。

稲佐署の調べによると、けがをしたのは同市立神町同造船機装課工員、平野義典さん(22)と同市新戸町、同機装内課工員、立道弘さん(45)。二人は事故と同時に三菱病院に運ばれ手当てを受けたが、平野さんが左太モモ骨折で五ヶ月、立道さんは右太モモ骨折で六ヶ月の重傷。

平野さんら三人は建造中の二十万トンタンカー第二デッキ工作室に取り付ける鉄製網戸十六枚(一枚二十キロ)など四百五十キロの綱材をクレーンで降ろす作業をしていた。上甲板にいた合図係の同船渠課員、江頭三郎さん(53)が目測を誤ったため、つり下げた網戸がボートデッキのホールを通過するさい、足場板の安全さく支柱に引っかかり、約十三メートル下の足場板に落下。そこで作業をしていた平野さんと立道さんに当たった。

同署では、クレーン合図係の不注意による事故とみて、江頭さんを業務上過失致傷の疑いで取り調べている』(長崎新聞七月十一日夕刊より)。

事件直後には、犬塚さんの責任は全く問題になっていなかったことは間違いない。犬塚さんの



災害の犯人はタービン爆発事故と同じ合理化（タービン爆発現場）

仕事は、岸壁にあった、網戸を同僚の三浦氏とともに、ロープでしばって（この仕事を玉掛けと呼ぶ）クレーンの釣具に取付ける仕事である。

判決理由によると、「このようなすべりやすい荷をつりあげて積込む場合は、その落下を防止するため、あらかじめ、だまぎをするか、荷をバスケットに入れるなど適切な玉掛をなすべき業務上の注意義務があるのに、これを怠り、だまぎをする等の措置を講じなかった過失により」とあり、要するに、犬塚さんの荷のしぼり方が悪いからこの事故が起こったということになったのである。

取調べの最初のころは、犬塚さんは、会社にたいしても、警察にたいしても、ほとんど、疑いや不信をもつようなことはなかった。

警察の事情聴取も、関係者の中で一番遅かつ

た。まず、前述の指揮者であり合図者である江頭氏が調べられ、つづいてクレインの運転手、合図補助者、納入会社社員の三人、最後に、一週間たってから、犬塚さんと同僚の三浦氏とが稲佐署から呼びだしを受けた。

話はごく気楽なこととして、作業長からいわれた。

犬塚さんは、自分で、昔は荒っぽかったですというように、戦争中、川南造船所で働き、戦後、炭坑にもいた頃、短刀を腹におさめて喧嘩したこともあるし、上役をスコップで撲ったこともあるほど、激しい性格のもち主である。三菱に入ってからも、鋳物師として働き、玉掛労働も憶え、気に入らなければ、相手が誰であろうと妥協しない強い気性で、働いてきた。とはいっても、今まで、一度も、人に迷惑をかけるようなことをしたことはなかったし、警察の厄介になつたこともなかった。

犬塚さんたちが待っていると、担当の小田巡査部長が入ってきて、じろっとみて、二人を案内した巡査にきいた。

「こいつらか？」

犬塚さんは自分の耳を疑い、頭をなにか強い力でガンとやられた衝撃をうけた。その時、すでに、犬塚さんを容疑者にしてたのかどうかわからなかったが、少なくとも、気楽に話す関係でないことはわかった。

取調べは、実にこまかいことまで、くり返しきいた。犬塚さんが、玉掛労働の熟練者であり、ポーシン（責任者）であることを、確認させながら、玉掛け（荷のしぼり方）の仕方について、

何度もきいた。そして、田畑のことや、家の広さや、家族構成、給料の中味まで、どうしてこんなことが必要なのだらうと不思議に思うようなことまで、ききだした。

犬塚さんは変だなと思いつつ、相手のペースにどんどんはまってしまった。犬塚さんには、刑事のものいい方から態度、にこにこ話していると思うと、突然、脅迫するような口調に変わった。人を罪人ときめつけているような感じにさせられたり、わずか一日の取調べがひどく、長く辛く感じられた。

それでも、その時は、警察はこんな所だと思いつつ、人には「大したことなかった」と話していた。

八月の最後の日に検事に呼び出されて聞かれた時に、また、同じことを繰り返していわされた。家族のことを聞かれた時に、いきなり

「犬塚ひろみは今どこにいるのか」

と、当時、新日鉄君津にいた次男のことを呼び捨てでいわれ、思わず、ギクつとなった。瞬間的に、息子が泥棒かなにか、悪いことでもしたのではないかと心配になった。

家に帰って、奥さんに、息子の消息はないかときいたが、別に変わったことはなかった。

明らかかな事件の背景とデッチ上げ

予想もしなかった有罪命令を受けとって、犬塚さんは、初めて、どうしたらいいかを考えた。同じ職場の分会幹部である船津教宣部長や久保平前委員長にも話し、古木書記長に、どうしたら

いいだろうかと、悩みをうちあけた。

犬塚さんにしてみれば、このままほおっておけば、罪人の名を着せられ、重傷をおって再起不能になるかもしれない同僚労働者にたいする責任を一生負いつづける立場になることを考えると、いてもたってもいられなかった。自分に責任があることなら耐えることもできるが、どんなに考えても、会社が自分に責任を押しつけたとしか考えようがないのだ。理由は分会員だからということしかない。

だが、奥さんも長男も、これ以上、事を大きくして、三菱を相手に裁判するようなことだけはやめてほしいという。「お父さん、五万円払わんね。就職にさしつかえるけん」子どもにいわれて、一応、金を用意してみた。有罪命令のことが新聞に乗ったことで、会社の中でも、隣近所でも、犬塚さんは罪人ということになり、家族は人前に顔を出せない辛い思いをしているのだからムリがないとも思う。だが、犬塚さんにしてみれば、よく説明ができないけど、仕事の仕組みのことも、自分に罪を押しつける会社の現状も、家族には、なかなか理解してもらえない辛さがあるのだ。

「あんたが、分会におるけん、こげんことになっとでしよ」

犬塚さんは、奥さんのその言葉に怒り、

「おいのやることに文句あるなら、出て行け」

と怒鳴ってはみたが、自分が情なくなつた。裁判所と三菱の力で罪人にされ、家庭の幸せまで奪われてしまうことを、どうすることもできん、自分が、会社が、命令に追いつちをかけるよう

に、犬塚さんの事故責任による譴責処分を決定したことが、分会の調査で明らかになった。分会は、古木書記長を先頭に、事故の状況と、判決の中身を点検し、会社の考えを追及し、命令にたいして、どんなたたかいを組むかを、慎重に考えた。

塩塚弁護士と相談していくなかで、この事件の背景と、デッチあげの状況が次第に、明らかになった。

「分裂以後の合理化と仕事量の急増の中で、仕事はさばききれんほど忙しい状態でした。立神から飽の浦まで二十万トンタンカーなど艤装（船体ができる途中、あるいは、進水後の船に、エンジンとか、内部装飾品とかさまざまな部品を取付けること）する船が並んで、岸壁の上には、トラックで運んできた艤装品をもう、おろす場所がないほどたてこんでいました。クレーンの数は少ないし、みんな奪い合いで、短い時間で、戦争のように、部品を積みこむわけです。そういう状態で、この事故はおこったわけです。犬塚さんの縛り方は、いつもの通りで、問題はないです。クレーン運転が未熟だったことと、荷物が揺れているのとめなかつた、合図者であり指揮者である江頭氏の責任が大きいです。とにかく、一番大きな責任は会社にあります」

元分会委員長の久保平氏が、艤装職場の先輩として、当時の状況を説明した。

前出の表にあったように、分裂の年四十年を契機に、死亡事故が急激に増えたことと、それに比例して、進水量が増え、四十五年には、実に四十年の進水量の二・三倍近く、二百三十三万トンを進水させているのだ。その中身は、ほとんど、大型石油タンカーの製造なのだ。

さらに、この船の開口部への積みこみは、狭い場所に人と品物のひしめく、危険な作業なの

で、分会が、以前からつぎのような改善提案を出していた。

- ① 開口部を広くとり品物を入れ易くすること。
- ② 開口部付近の足場板はとりはずし、積込品が接触するのを防ぐこと。
- ③ 積込み作業に際し、関係人員をふやし、吊荷のゆれを防止する人員を確保すること。
- ④ 積込み作業に入った時は、ベルを鳴らし、その下付近の作業者は退避させるようその設備をつけること。

だが、会社は労働者の要求を無視して、一切、改善を行わず、その結果、積み荷が揺れてもそれをとめる人員がおらず、ついに足場板にぶつかり、落下し、下で働いている労働者もベルがないため、気づかずに犠牲になるといふ、警告通りの事故が発生したわけだ。

分会は、組織をあげて、労働者が安心して働ける職場をつくるたたかいとして、全面的に、犬塚さんの無実をたたかいとる裁判闘争を行なうことを決定した。

こげんインチキの学校出にまけるものか

この裁判闘争は、犬塚さんにとっても、分会にとっても、大変なたたかいであった。

三菱の不法不当な分裂攻撃で痛手を受けて以来、初めて、本格的にたたかう、法廷闘争であり、安全と権利を守る職場闘争だった。三菱は、分裂攻撃の成功によって、憲法違反や労働組合法などの法違反も、三菱の中ではまかり通るとみて、つぎつぎに人権無視の犯罪行為を繰り返していた。

第一章 人間・職場破壊の十年

以前には、会社や上司の責任で処理されていた災害事故が、現場の労働者の責任に押しつけられるようになり、事故は労働者の不注意によるという考え方が、しだいに、現場労働者に重苦しい重圧となって拵がっていた。仕事中の事故を報告せず、私傷病扱いにさせ、出勤を強要することも、重大な労働基準法違反のだが、よほどのことがないとそういう事実表に出さない。

新労組合員はみんな、泣き寝入りして、作業長のいう通りになってしまうのが実状なのだ。

犬塚裁判は、こうした、労働者の権利がとことんまで奪われていく三菱の現状に、警鐘を鳴らし、歯止めをかけ、新労のように、会社のいうなりの組合の下で、どんなことが起こるかを明らかにし、少しでも会社のやり方をかえさせる重要な役割があった。

犬塚さんにとって、ほんとうに考えてみたこともなかった、大変なたたかひの毎日となった。

一つ一つ、古木書記長たちに相談しながらすすむのだけれど、なにしろ警察だけでなく、裁判所がまた、恐しく、得体が知れない所で、なにをどんな風に、誰にむかっていえばいいのか、なにもかも見当がつかなかった。今まで「船とロープとジャックル」と、働き慣れた仕事場、そして、女房子どもでつくってきた田舎暮らし——それが犬塚さんの小さな世界のすべてだった。

「法廷に立って、検事にひつつこく、いろいろきかれて、初めは、頭にきて、のどがからからに
かわいて、声がつまって出んとです。おいは人の前で話すことは、下手クソで、あげん、大勢の
人の前で、大学や高校や、学校出の一杯いる前で、話したことは、ほんのこつ、生まれて初めて
ですたい。それでん、何回目かに、あんまり、同じことばっかり聞くもんで、とうとうがまん
で きんようになって、検事に怒鳴ったとです。なんべん同じこと聞くとか！ と……」

犬塚さんは、その時、こん畜生、こげんインチキの学校出に敗けるもんかと、腹がすわったという。

だが、犬塚さん一家にとって、長いトンネルの中に入ったような、不安で気の鎮まらない毎日がつづいた。

「こんなことをつづけて、裁判に勝てるのだろうか？ もし、敗けたら、どうなるのか」

犬塚さんは、慣れない心の疲れに、夜も眠れず、医者にノイローゼと診断されて、四十日も会社を休んでしまった。

奥さんは、犬塚さんが三菱と裁判の苦勞でダメになってしまいはしないかと心配し、子どもたちの仕事や将来にも響きはしないかと悩み、鹿島の神さんにお詣りするようになった。

夫婦のいい争う日がつづいた。ある日、あまりにいうことをきいてくれない、奥さんにむかって大声で怒鳴った。

「貴様、そんげん、おれに反対して、人に恥をかかせるなら、死にたきゃ死ね！ 泥沼でんなんでん、首つっこんで死ね！」

それからしばらくして、奥さんが「神さん」にお詣りにいったきり、その夜、帰って来なかった。翌日になっても音沙汰ない。大浦の兄さんにきてもらって、いきさつを話した。手分けして、あっちこっち心当りを探してもらった。だが、なんの手がかりもない。どうしようもなく、座敷に大の字になって寝ていると、長男がいった。

「お父さんも、えらいノンキかねえ。海岸でん見て廻らんね、山を探してみんね」

息子の顔の真剣な色をみて、犬塚さんの胸はしめつけられた。今まで、抑えていた不安が一べんに、身体中を駆けめぐった。

「ひょっとしたら、どこかの駅のホームからとびこんどりやせんやろか……松の木からぶら下つとりやせんやろか……」

いわれてみれば、三十五年間、一緒に連れそってきた妻……犬塚さんはこみあげてくる、悲しみとも怒りともつかない激情を押えることができなかった。

「人の足をひっぱる、クサレ者は死ね！ 死ね！」という心の声と、大声をあげて、妻を探し歩きたい衝動が、交互に、犬塚さんの身体をつきあげた。

奥さんは三日たって、無事で知人宅にいたことがわかった。

3 こんな汚なことを……同盟重工労組のやりくち——OとHの場合

どうもおかしい。破壊分子。

OやHは二十代の若者たちである。

彼らは分裂の悲劇は知らないし、労働組合については、三菱入社の日から、重工労組（新労）が唯一の組合だと教えられ、分会は破壊分子の集まる悪い組合で、なくさなければいけないし、そのうち消滅するだろうというふうに、会社の上司からも、新労の委員たちからも、繰り返しい

われてきた。

Oの場合は、とくに三菱が技術学校を廃止して、外部の高校卒を採用するようになってからの社員だし、高校時代から世の中の動きには敏感な方ではなかったから、三菱内部でどんな社員教育が行なわれているのか、労働者や労働組合の扱いがどうなっているのか、そんなことはいっさい知らなかった。

教育期間を通じて、一番印象に残っていることは、徹底した分会員と破壊分子にたいする悪口であり、つきあってはならない先輩のリストアップだった。その時は、そんなものかと聞いていたし、睨まれないようにするにはいろいろつきあい方もむつかしいなと思った程度だったが、なんとなく、同じ三菱社員のことをそんなに口汚く、悪口をいうのがいい気持がしなかったようだ。どんなに悪いところがあっても、社員として入社した人たちははずだし、どうしてこっちから口をきかないというようなことをしなければならぬか、納得いかなかったのだ。

「重工労組が一万五千もいて、分会が何百。自分たちがよかことやっとる自信があれば、だまっでやっとれば、悪いものは、消えていくやろ……おいは、そげん思うたけん、どうも、ヒステリックにいうとは好かんやっただす」

Oの小さな疑問が、大きくなったのは、現場で、機械の操作を先輩たちにきくようになった時だった。

Kさんは、Oにとって頼りがいのある先輩にみえた。十歳くらい上で、あんまり余計なことはいわないが、いわれることは中身があって、こちらの聞きたいことを適確に話してくれる。余裕

があつて、意地悪でなく、技術のことも、もう一人の先輩のように「自分で覚えろ」というような意地悪をいわない。OはKさんをすっかり信頼し、なにかも相談した。Oは高校の頃から、けっこう遊びもしたし、男友だちも、女の子とのつきあいも幅広く、初ものにどんだん喰いつく方だったから、その人間がいい人間かどうか、嗅ぎわかる感は鋭いと自分で思っていた。だから、Kさんはキツトいい人だと信じていた。

ところが、間もなく、別の先輩と呼ばれて

「Kさんにいろいろきいているようやが、やめた方がよか！あの人は分会員やぞ！」

Oは面喰った。

Kさんがいろいろきかされてきた、破壊分子であり、悪者だということ。どう考えても、Oにとっては、Kさんは、この作業班の中で、仕事もよくできて、親切で、先輩ぶらないもつとも頼りになる人なのだ。この人が、生産を破壊し、三菱のためにならない人間だとは思えない。それどころか、上役にごますつてばかりいる副作業長や他の先輩より、はるかに仕事できて、会社のためになっているようにみえるのだ。

「おいは、技術を覚えて、腕をあげるために、先輩にきいとるやっか。Kさんに習ったらいかんというなら、下手クソな人に習えちゅうことやっか！」

Oは、口の中で、ぶつぶついいながら、どうも、三菱の会社の中では、いわれていることと実際が、だいぶ違っていると考えていた。

出はじめた自分たちの重工労組への疑問

Oが重工労組員として、自分たちの組合に疑問をはっきり持ちだしたのは、昭和四十七年の五月、長崎文化会館で開かれた青春フェスティバルの当日だった。

OはHやフォークグループをつくっている友人から誘われて、この会の券を買った。三菱に働く若者たちが集まって、自分たちで企画し、出演し、みんなが参加者でもあり、出演者でもある楽しい一日になるということだった。フォークも合唱も寸劇も落語も民謡も太鼓も、ありとあらゆる演しものが考えられていた。

「若い娘たちも大勢くるし、楽しくて、ワクワク胸の踊る一日！ 時は五月、若者よ来たれ」

Oは、陽気に騒ぐことは、もともと好きだし、滅茶苦茶に忙しくて、じめじめした職場のなかで、欲求不満になっている気分をスカッとさせられればという期待があった。

だが、この集まりに、重工労組幹部からクレームがついた。理由は、重工労組に関係ない幽霊集団「名のない実行委員会」が企画したものだからということ。

「あいは、破壊分子が応援しとる奴らしかけん、いかん方がよかぞ」

重工労組のS委員にそういわれて、Oはフェスティバルに参加する腹を決めた。重工労組の教宣ニュースで、フェスティバルに行くな行くなとあふられて迷っていたのだが、S委員のいやらしい方を書いて、ムカムカと気分が悪くなり、なにがあっても、いつてやるという決心をかためた。このSという委員はペラペラよくしゃべり、仕事もできないのに、作業長にとりいつて、ポーションになり、新労の仕事だといつては出歩いている男だった。Oが一番ムカつとしたこ

とは、Sが、今の女房とうまくいかずに離婚したいという話をしていた時に、いったせりふである。

「昇給昇格にひびくけん、離婚も考えんばいかんとやろかねえ……」

Oはその時、男女の仲のことまで、出世にひびくと本気でいう、この先輩の顔をあらためて見直し、三菱で生きていくには、こんなことまでしなければならんのかと、ゾツとなったことを忘れない。

「クソ！ お祭りはお祭りやっか！ 誰がやろうと、好きな奴が集まってやればよかやろ！ アカでんクロでん、なんの関係があつとか！」

Oは、胸を張って、当日、会場に向かった。そして、文化会館の玄関に入る前に、異様な人間たちの集団と行動にぶつかった。

実行委員のHやTたちが彼らの前に立ちはだかって、必死に抗議している。

「あんたたち、汚かことはやめんですか！ 妨害はやめんですか！ そげんとここに立っておられたら、車も入れんですから」

「参加者をチェックするつもりですか！ 卑きょうなことをやめてください」

五十人ほどいるこの男たちは、重工労組の委員や青婦協の幹部たちだった。Sの姿も後の方に見える。彼らは明らかに、フェスティバルの妨害と、参加者にたいするチェックを目的にきているのだ。表情はこわばり、まるで刑事のような表情だ。

Oはかっとな胸の中が燃えたり、思わずSの視線を正面から受けとめて睨み返していた。O

は、瞬間的にこの五十人の集団の異様な視線に、どす黒い敵意を感じた。同じ職場の同僚とか先輩とか思えない冷酷な意志を感じた。

Oは会場に入って、八百の定員にはほぼ満席近く入り、ステージの寸劇に爆笑している若者たちの声を聞いてホットとなった。実行委員のHも、出演者として奮闘している。

「よかった。これでよかった……」

嬉しくなって、ひょっと後をみると、先刻の委員たちの姿が眼にとびこんできた。とうとう中にまで入ってきて、参加者の顔をチェックしただのだ。Oの胸の中に怒りをこえた、闘魂がふつふつと燃えていた。

私がOやHに会えたのは、五一年に入って三回目の取材の時だった。なにしろ、このフェスティバルのことにしろ、これから書く重工労組内で執行部を批判して正義の士が立候補した自由立候補選挙のことにせよ、重工労組の若者たちの中で起こったことだから、分会の人たちにきいても、よくわからない。私が勝手に動いて知るしかない。Oとは、たまたま、分会員に知人がいて知りあえたが、Hとは私が直接、訪ねて行って会うことができた。

Hについては、重工労組の幹部たちの迫害を受けながら、敢然とたたかっているリーダーであり、民青らしいという噂をきいていたが、会ってみると、実に、穏やかで誠実さのあふれた若者だった。私にとって民青であろうと、社青同であろうと、創価学会青年部であろうと、それはどうでもよかった。私にとって、主要な観点は、三菱の現場で、若者たちが、どんなふうに働き、

どんなふうに悩み、苦しみ、生きているのか、その偽りのない姿を知りたかったのだ。

「昭和四十三年ごろ、現場に配属になったころは、よう遊んどったとです。技術学校の同級生連中で、しめし合わせて、パチンコして、映画みて、バーやキャバレーで飲んで、毎日、遊んだもんです」

Hは、長崎出身、最後の技術学校卒業生で兄さんも三菱社員。仕事は、造船現場の玉掛けである。「造船」の仕事とは、運搬なり」といわれるほど、切ったり張ったりした鉄のブロックをクレーンで運搬する玉掛けの仕事は、造船の中心的労働の一つであり、造船労働の華ともいえる仕事である。Hは真面目で仕事はできるし、上役にも可愛がられて、若いのに初めから、玉掛け作業のスタッフ的な仕事を与えられた。だが、彼には職場の中にあるイヤな空気がまんならなかった。Oと同じように、あいつとあいつが分会員だからつき合うなといわれたし、見せしめのために、隔離されて仕事している分会員の姿もみた。だが、Hにたいしては、こんなやり方は逆効果で、本気になって、分会とはどんな組合か、労働組合とはなにかを考えさせるきっかけになってしまった。そのうえ、彼の所属する船殻外業関係の現場には、溶接や鉄工関係など、分会員が比較的多く、分裂後も、新労働組合員にも影響力をもちつづけていたから、Hの眼は、急速に、労働者の現状と労働組合のあり方に向けられ、旺盛な学習に向けられることになった。

初めは、組合のことはタブーで、遊ぶこと飲むことで一致していた同級生グループの中で、春闘の賃上げのことや、重工労組のたたかい方が話題にのぼるようになった。

「分会はストばかりやったて悪口いうとるけんが、今の重工労組の幹部はなんね、会社と八百

長やっとなるやっか！ 要求は八千円で出して恰好だけ、会社と団体交渉して、結局六千五百円得手を打って、決めとるやけん。八百長たい！ 会社と初めから「歯止め」いくらて、決めとつとぞ！ こげん、インチキか労働運動があるもんね！」

仲間同志の気安さで、つい本音が出るようになり、中にいた幹部支持派の一人と口論になった。

Hは、香焼工場に配属になった同級生のTとともに、重工労組の現状を少しでも良くするようになろうと話しあうようになった。

そして、彼は、まず、青年部の中で、仲間をふやし、生き生き活動することから始めた。

ひきずりおろされた組合選挙立候補

青春フェスティバルの成功と重工労組幹部が正式に許可しないサークルもレクリエーション活動もいっさい認めないというひどい弾圧の体験から、若者たちの間に「これでいいのか」という憤りの声があがりだした。

「自由に歌をうたうのがなんで悪かど？ 好きな仲間が集まるのがなんで悪かど？」

「会社の勤労と一緒にあって、参加者の顔と名前をチェックして、恐迫する——こいが、労働組合のやることね！」

「三菱と民社党を大事にして、この二つに文句いう人間を踏み絵にかけるとが、労働組合のやることね！ 同盟で組合は労働者の組合でなかとね！」

「フォークをやりたか者はフォーク、サッカーのやりたか者はサッカー、好きな者が好きな者同志、好きなこととするがサークルやるが」

「おいたちの声を反映する執行委員を選ばんば」

若者たちの間から、執行委員選挙に、自分たちの代表を送ろうという声があがり、フェスティバル実行委員の中から、HとYを候補者にすることを決めた。

重工労組の選挙制度は、二十名の各作業班毎に作業長の推せんが決まることの多い職場委員、そして各課毎に、八十名単位くらいで選ばれる「委員」があり、さらにその上に全組合員の中から選ばれる十数人の執行委員がいる。執行委員は、推せん委員会の推す以外の立候補者は、二十名の組合員の推せんがあれば、誰でも立候補できることになっている。

「そげん表立ったことをすれば、会社と重工労組に憎まれて、三菱におれんようになってぞ」

Hは、忠告には感謝したが、今の現状を少しでもよくするために、先頭に立つ人間が必要であり、それが自分の役割だと、決心していた。

Hは、なぜ、今、立候補する必要があるかを語り、職場の声を、組合機関に反映させる必要を訴えて、推せん人になってくれる仲間を探した。Hに二十六人、Yに三十三人の推せん人が集まった。立候補締切りの日、二人の推せん人を揃えて、手続きをすませた。なにか、妨害が入りほしくないかと心配していたけれど、やっと選挙に立候補できたことで、ホッと一安心した。

だが、欲びは長続きしなかった。推せん人辞退者がその日のうちに数人出たのである。後で判ったことだが、その夜、立候補締切りの午後七時から一時間たった午後八時には、重工労組の幹

部が、推せん人になった労働者の家に説得に行っていたのである。

Hたちは、ひるまずに翌日の昼休み、各職場をまわって、立候補の挨拶をした。ある職場の挨拶が終わり、つぎに移ろうとした時、組合の幹部がきて、推せん人の辞退者が増えて二十人を割ってしまつて資格がなくなったから立候補をやめてくれといった。

Hは口惜し泣きに泣いた。

“この卑劣なやり口！ 立候補をしめ切った後で、組合の委員と、その推せん人の上司である作業長が一緒になつて、説得に廻る。説得とは名ばかりで、こんな悪い奴の推せん人になつたら、あなたのためにならないと、会社の職制にいわれて、恐しくならない人間がどれだけいるだらう。そんな卑きょうなことを、労働組合の役員と名のつく人間がやるという、このひどい組織、三菱重工労組長船支部！ こんなことが許されていいものか！”

Hは、涙をぬぐつて、各職場に、なぜ、自分が立候補をやめなければならなくなったかを報告して歩いた。そして、投票日の翌日、ドシャ降りの雨の中で、ムリヤリ失格にされたいきさつをビラにして数人の仲間たちとまいた。

“こんなことで敗けるもんか！ 必ず、職場で支持してくれる同僚や先輩の声を、力にする日まで、たたかいつづける！”

Hは、決意をこめて、一枚一枚、ビラを、手渡した。

4 人間をとりもどすたたい——村里の場合

呼吸することも管理され

村里さんは三十三歳の外業ドックで働く、溶接労働者である。分会では若い労働者の部分に属する。つまり、分裂後十年間、三菱は入社してくる労働者を強制的に、重工労組の組合員にしてきたから、いくらかの途中入社した労働者や復帰者を除けば、二十代の若者は分会にはおらず、現在、三十歳の人たちが、分裂時、十九歳前後で、最も若い分会員だったわけだ。

村里さんは分裂の時、技術学校を卒業して三年、労働者としても組合員としても駆けだしで、一つ一つを経験し、ぶつかりつまずきながら今日まで来たが、いつの間にか、仕事でも、組合活動でも、職場の重要な要の位置に立たされていった。

村里さんの家は、飽の浦から峠をこした、新興住宅団地に近い長崎郊外の丘の一隅に立っていた。新築の家は幼稚園の先生をしている奥さんと共稼ぎして、仲間の労働提供でやっと建てたもの。十年間、差別されつづけ、たたかいつづけている分会組合員というイメージを吹きとばすように、三十坪の二階建ては、小ざっぱりとして明るい。早朝、村里さんはバイクで造船所へ、奥さんは小型車で二人の子どもたちを保育園におろして、自分の勤める幼稚園へ。生活は忙しく厳しいが、明るく素直な子どもさんたちの表情のように、この一家には胸を張って一生懸命生きる

労働者一家の健康な匂いが満ちていた。

村里さんの語ってくれた、船を造る外業現場の状況は厳しく、息がつまりそうだった。

「この前、掃除のおばさん十何人が一べんに首切られました。ずうっと、造船所の底辺と三菱を支えてきた人たちです。船の掃除なら世界一たいと自分でいうくらい、草帯とバケツで、建造船の最後の仕上げをしてくれた人たちです。たった十何人の人たちを、三菱が首切らんでも……そう思っても、三菱は、思い通りに、合理化をすすめてきます。不況になって、日に日に、労働条件が変わっていき、会社が、先手先手と手を打って、じわじわ、真綿で労働者の首をしめつけてくる感じで、これが、一番やりにくかいです。

下請けがやられて、今度は、本工に一時帰休・配転・出向といろいろ出てくるわけですが、会社は、ずっと前から、大々的に不況宣伝をし、全員を集めたり、作業長を通したりして、仕事がなくなくなる心構えをさせたり、節約運動をやらせたりして、不況ムードをあおっている。

労働者の中に『仕事がなかけん、出向になってもしょうがなか』という空気が出来て、なかなか、正面切って『おれは配転に応じん』とはいえなくなる。万事、そういう調子で、ズルズル会社のペースに乗せられます。少し休みが多くて、『日付けなしの退職届』を書かされたことも、この人権じゅうりん、不法不当なやり方をたたかうという方向にはいかず、反対に、休むとああなるから、ちょっとの病気で休むまい、休暇もとらんようにしようという具合になります。

分会員の中には、不況になって、自分の身がやられるようになったら、新労の仲間たちも気が

ついて、起ちあがってくれるだろうという期待もありましたが、そうはならんとです。ほおっておけば、ますます会社の思い通りになっていきます」

私が、そこまで会社が労働者を思うままにできるようになったのは、労務管理の力ですかときいたのに答えて、村里さんはいった。

「そうです。重工労組が前面に出て、作業長たち会社と一緒にしめつける、その成果です。広場の体操をみられたでしょう。みんな、疲れてダラダラやっている、係長が、一、二、一、二と大声でやれという。すると、その日の昼から、いわれた通り、バカでかい声をはりあげる。ただし、深呼吸だけは静かに声を出さんようにといわれると、その通り、音も立てんでやる。手のあげ方、息の吸い方まで、職制に管理されるわけです」

近松さんが煙草を吸う時間をチェックされる職場の実態がここにあるのだ。

踏みじられた青春の日々に——分裂の痛み

村里さんが分会員として、雨の日も風の日も、外業ドック五百人の労働者の先頭に立ってたたかうようになるまでには、さまざまなきことがあった。

分裂当時の気持を、つぎのように書いた。

「二つの勢力の対立は日に日に激しくなり、勇しく分裂屋をのしった男たちが手の平を返すように第二組合へ走った。あの人もこの人も信じていた人びとが翌日から目を伏せてしゃべらなくなっていく。(中略)俺は二三歳、それは青春のご真中、感じやすい俺の心に、どうしても納得

できなかったこと、それは——人の心が手の平返すように、そんなに簡単に変えられるものなのか、という疑問——人を信じる心が、これほど乱暴に、幾度となく踏みつけられ、足げにされたことはかつてない。失望と怒りの日々……」

村里さんの分会員としての自覚は、ここから始まった。仲間が切り裂かれ、人間が人間を裏切る痛みと失望を知った日から。

もともと、村里さんの両親は昭和初期の不況時代に地方銀行のサラリーマンで食えなくなり、小さな食堂を経営しながら、七人の子どもを育てあげた勤労一家だった。村里さんは、その末っ子で、戦中戦後の幼少年時代を家族の愛情と協力で乗り切ってきた体験が、人間を信じる人生観の大きな出発点となっていた。

兄弟みんな働きながら学んだ。上の兄二人は、戦争中の佐世保海軍工廠年少工となり、長兄は十九歳で伍長になる記録を作った。そして、すぐ上の兄と村里さんが、ともに優秀な成績で中学を出て、三菱技術学校に入った。三菱の技術を支えてきた貧しく優れた地方出身者の典型的家系だった。

村里さんも分裂という異常事態が発生しなければ、違った人生を歩いていたかもしれない。事実、彼は、非常に優秀な成績で技術学校を卒業し、ラグビー部では小さな身体でフルバックの要の位置を守り、三菱重工チームの正選手として九州代表となり、花園ラグビー場までいったし、また、溶接技術三菱一となり、全国大会に出場して「日本で二番目の溶接工」の栄冠をかちとった。兄さんも大変若くして副作業長になったし、彼もエリート技術者の道を歩む立場にいたの

だ。

村里さんは、家族の愛情を大切にしように、技術学校同期生の友情を三菱で生きていく大事なより所とした。同じ釜のメシを食い、一つ布団に寝て青春を語りあつた寮生時代の友情は、現場で働くようになってもつづき、この集団の名を「幹部会」と呼んだ。真面目に、将来は「三菱の幹部」になる人間の集まりという意味でつけたという。

こんなわけだから、この幹部会の仲間の人である高尾錦司さんが、クレーンで段取中の仮付部分が落ちてきて頭にあたり、脳天を割り、二十四歳で短い生命を終えた時、村里さんの悲しみと怒りのやり場のない心はいやおうなく三菱に向けられた。村里さんは、亡骸の側で誰はばかりとなく号泣した。

「村、こい！ ここで泣いてなんになる。仇を討つことぞ」

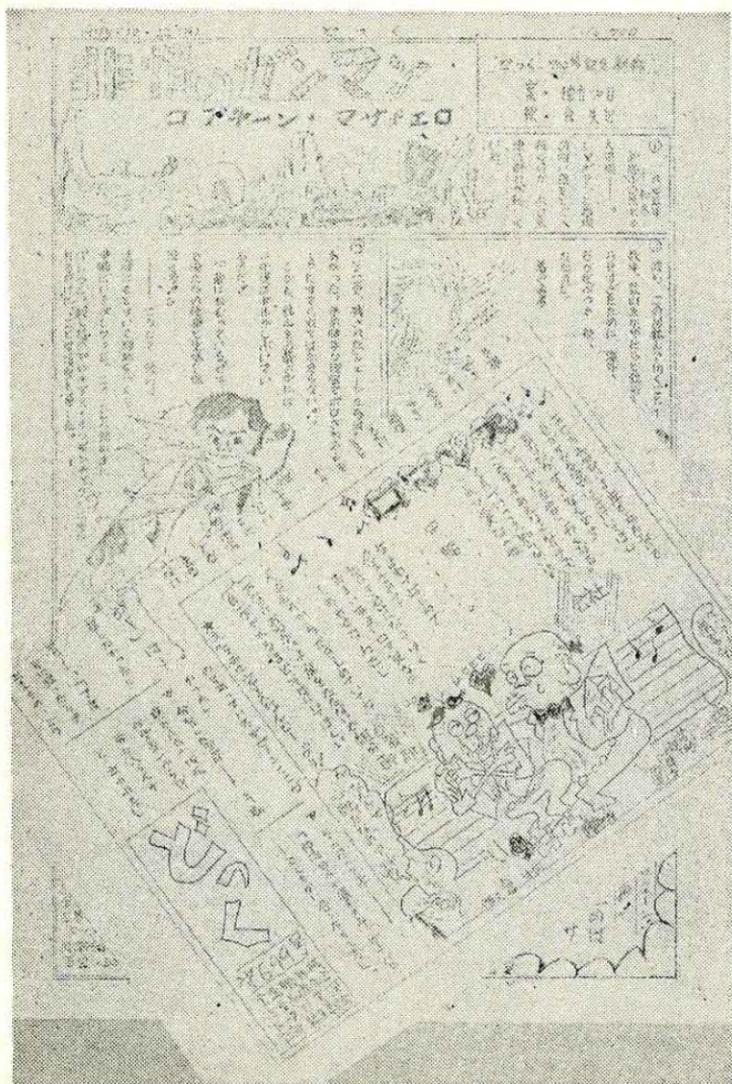
同じ仲間、鉄工の木原正彦さんに病院からひっぱり出されていわれるまで、泣きつづけた。

村里さんは、葬儀が終わって、高尾さんの故郷の家までつきそっていった時、お父さんが桐の骨箱をたたいて、男泣きに泣いていった言葉を忘れない。

「俺の息子がたつた三十五万円！ こがん身体にしてしもうて、なんと思ふとるか！」

村里さんは、あの時、自分が生涯、三菱の労働者として、分会の組合員としてたたかいつづけ、労働者が幸せに働くことのできる日本をつくる日まで頑張る決意をかためた。

第一章 人間・職場破壊の十年



汚染基準の二万三千倍の汚れた職場を変えよう

造船所の中でも、外業現場の作業条件はとくに厳しく、危険で、職業病の巣だといわれる。夏でも、冬でも、作業服に脚をしめる脚はん、金具で怪我を防ぐ安全靴、ヘルメットをかぶり、ベルトをしめ、袋にいれたハンマーなどの作業用具、そして、生命づな——弁慶の七つ道具のように身をおおって作業現場に向かう。

冬の酷寒、ふきさらしの甲板での作業は、骨の随までこごえきり、特別な職業病にかからなくても、神経痛・腰痛にかららない人の方が不思議である。冬は零下に凍りつく鉄板が、夏には、直射日光に焼かれて、一メートル離れた空気の温度が五十度を越す。安全靴をはいていても、鉄板に足がつけられない。村里さんは、会社の安全衛生管理のデタラメさに抗議して、会社が創立記念日にくれた温度計を毎日、作業現場に持っていったことがある。上甲板では、水銀柱が五十度まで上りきって、厳密な温度ははかれない。

どんなに暑くても、溶接のアークで火傷をしないように、怪我しないように、作業服をぬぐわけにはいかない。後から後から、身体中の汗が流れだして、水のみ、塩をなめなければ、がまんできかない。ベルトは汗で白く変色し、靴の中でむれた足は、毎日洗っていても水虫になる。ヘルメットの下で頭はむれ、頭髪ははげてくる。そして、騒音で難聴となり、アークで眼をやられる。腰をやられ、肩をやられ、鼻毛まで長くのびる。かくて、造船現場で一夏仕事をすると、三キログラムから五キログラムは必ずやせ、かつて、好景気で若者たちが大勢入ってきた頃に、いやになってやめていくのはたいがい、この季節だったという。

それでも三十代まではまだいい。四十を過ぎた造船労働者の老けこみ方はひどい。髪はうすく、視力はうすれ、手がふるえ、皮膚はカサカサになり、性欲減退もいちじるしく、まず、一見五十代に見える人たちが少なくない。

造船労働者には中コロ、満コロが多いといわれるように、途中で死ぬ人や、停年になって間もなく寿命のつぎる人たちが多く、その状況も厳密にはわかっていない。

こうした昔からあった労働環境の劣悪さに加えて、超大型船建造にもなる技術革新と作業方法の変化により、さらに複雑な職業病が生まれつつあるのだ。アーク・カウジングはものすごい粉じんを吹きとばし、グラインダーがうなり声をあげ、サンダー・ブラストがまっ黒い粉じんをふりそそぐ。そして、各種自動溶接器が、異常な速度で普及され、粉雪のようにヘルメットにふりつもる半自動溶接ノーガスの煙に含まれる粉じん濃度は、環境庁大気汚染基準の二万三千倍なのだ。

村里さんは、まず、職場の働き、生きる環境を少しでも改善することに手をつけた。分裂によって生まれた重工労組が、すべて会社のいう通りの方向で動いているから、誰かが本気で生命と安全を守らない限り、労働者は日に日に、自分の生命をすり減らし、削られて、廃人になっていく。

村里さんたちは、労働科学研究所の佐野博士の研究結果から今まで無害といわれていた溶接じん肺がそうでない事実を知り、職場新聞「どっく」を通じて、職場のみんなに知らせ、改善しようとして訴えた。

「課長、これが見えんとですか！ あんたたちは、安全規則ばかり作って、ほんとに必要な安全施設には、全然、金を使わん」

ある時、村里さんは、たまりかねて、課長にまっ黒になったフィルターマスクをつきつけて直談判した。その日のうちに、三百トンクレーンに運ばれていく、排気のための十五馬力ファンをみて、労働者はたたかいの成果を喜び、歓声をあげた。

親友・兄弟を奪われても——人間をとりもどそう

外業ドックでは、職場の新聞「どっく」を出しつづけている。泉原教宣部長が軸になってくる分会機関紙以外に、「てつのひ」とか「火花」とか「プロペラ」とか、各職場でその職場のすべての労働者に向けたニュースが発行されている。村里さんは、新聞の作り手の一人として、会社や新労幹部の反労働者の行為を告発する文章や痛烈な皮肉をこめた漫画や、仲間を失う悲しみと怒りをこめた詩などを書きつづけてきた（八八頁）。自分たちの手作りの新聞を、門前や食堂で、一枚一枚、五百人のドック労働者に手渡す。だが、作業長にいわれ、受けとらない人たちも多い。ピラは一頃、ほとんど取らなくなっていた時もある。それまで、ずっと受けとってくれていた人が、ある日、電話をかけてきていった。「明日から、おいの態度が変わるかもしれんが、勘弁してくれんね。ピラもとれんし、挨拶もできんかも……おいの気持とは別やけん、悪く思わんで……」その人は、予告通り、翌朝から、お早うの挨拶もしなくなった。

災害・職業病で身をきり刻まれることはつらいが、人間同志の愛情を引きさかれることも辛く

悲しい。頭にきて、相手をぶん撲りたい衝動にかられることさえある。人間生身で生きているのだから、生涯かけた職場で、口もきかず、挨拶もしない毎日がつづいたら、気が狂いそうになるのも当然だ。だが、感情をぶっつけていたのでは、ものごとには変りはしない。

村里さんにとって、兄さんが組合を脱けたことはこのうえなく辛いことだった。いよいよ、そのことがはっきりした時、彼は、兄さんをゆずぶって泣いた。彼は、そのことについて、多くを語らない。彼だけでない。組合の違いが理由で、親子兄弟親戚がつき合わなくなった人たちが、いったい、どれほどいることだろう。

ある分会員は、兄が新労組組合員となった日から、家を出て、年に一度の法事の日には顔を合わせても、兄は必要なこと以外、口をきこうとしない。彼の先輩、片山現副委員長夫人は、三菱病院で分会員として頑張っているけれど、結婚式の日には親はもちろん、親族だれ一人出席してもらえず、数年たって、子どもが生まれ、やっとお母さんに抱いてもらうことができた。

それにしても、三菱の中では、友情も肉親の情も、自然な形では存在しえないのが、大勢であるという、この現実。

村里さんは、あきらめない。親友を奪われ、兄弟の関係をこわされたなかから、人間同志の暖かい関係を、人間らしいつきあいを、復活させ、拡げたいと願う。

だから、彼は、分裂後も、現役引退になる二十八歳まで、ラグビーをやめなかった。こんなに、人間を分裂させ、バラバラにさせる力がふき荒れている時だからこそ、友情と信頼と団結をこのうえなく大切にするラグビーを、とことん愛した。ただ無心に、チームの勝利のために、自

分の任務を果たすスポーツ精神は、考えや立場をこえた友情をつくってくれた。

ある交換試合の時、会社の指示で、村里をメンバーから外せといわれたことがあった。その時、監督などが、いってくれた。

「村里を外すなら、われわれは試合を辞退します」

あの瞬間の仲間の友情の有難さを彼は忘れない。会社にしてみれば、こういう人間の自然な愛情の交流が恐しいから、分会員を職場で孤立させ、あらゆるグループから外そうとするのだ。

だが、村里さんは、あきらめない。三菱の職場にかつてはいきいきと流れていた働く者同志の連帯と友情は、決して枯れてはいない、いつの日か、必ず、人間が人間らしく素直に笑い、歌い、語りあう、そんな職場に戻す日がくることを信じて……。

Ⅲ 会社・新労一体の支配体制の柱

— 職場・地域・青年支配のしかけ

1 職場支配の“新従業員制度”の効用

昭和四十年末の労働組合分裂攻撃に始まり、昭和四十七、八年の“世界の三菱”を代表する香焼新工場の完成までを、三菱の新しい労働者支配の道の確立の時とみていいだろう。“世界の三菱”の経営者たちがなにを考えて、なりふりかまわぬ分裂破壊攻撃を行なったかは、つぎに触